Nagoya University

山岸文庫蔵『伝公条本源氏物語』のAMS^{14}C年代

横井　孝[1)]・小田寛貴[2)]・野村精一[1)]
中村俊夫[2)]・上野英子[1)]・丹生越子[2)]

1）実践女子大学文学部国文学科　〒191-8510　日野市大坂上 4-1-1
2）名古屋大学年代測定資料研究センター　〒464-8602　名古屋市千種区不老町

1．はじめに

ここにいう山岸文庫蔵『公条本源氏物語』とは，実践女子大学図書館現蔵にして山岸徳平旧蔵書のうち「公条本」と称する『源氏物語』写本２５冊を指す．「公条」は，室町時代末期の古典学者三条西実隆（康正元年～天文６年＝ 1455 ～ 1537）の嫡男で，本人も古典研究・歌人であった公条（文明 19 年～永禄６年＝ 1487 ～ 1563）その人を指すものと思われる．実隆・公条そして公条の子実枝（実澄の改名，永正８年～天正７年＝ 1511 ～ 1579）の３代を通して培われた古典文化・文学の素養，特に『源氏物語』研究を国文学の世界では「三条西家の古典学」「三条西家源氏学」などと称し，当該物語の受容史・伝流史の１画期を造り出していると見なす．この三条西家に直接かかわる『源氏物語』写本は，現在のところ，日本大学総合図書館と宮内庁書陵部とに所蔵される２種の三条西家証本の存在が知られている．

今回調査の対象とした実践女子大学本の「公条」に関して，上の人物比定が正しく，さらに公条にかかわる写本であると推考できるならば，三条西家に関係する『源氏物語』のあらたな第３の写本の存在を明らめることになり，この物語の本文研究史上に１つの地歩を築くことになるかも知れない．しかし，公条本には書写者を伝える奥書・識語を有さず，伝来についての関連資料もないために，実体を明らかにする直接的な方途に欠ける憾みがある．そこで，本書の形体（体裁）・書風などを通しての書誌学的知見による推定を押し進めると同時に，ＡＭＳ^{14}Ｃ年代による結果とを照合し，公条本を分析する方法として両者が相互に有意であることを論じたい．

2．書誌学的知見について

公条本は，『源氏物語』諸本中，藤原定家（応保２年～仁治８年＝ 1162 ～ 1241）校訂本「青表紙」に端を発する系統に属する．歌学の高まりとともに定家の業績は神格化され，青表紙本系統の写本は忠実に書写されるのを基本としたが，それでもなおか

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

つ転写を繰り返すうちに多様な異文を有するようになり，室町時代後期の段階での本文校訂をしたのが三条西家であり，その結果遺されたのが三条西家証本である．

現日本大学所蔵証本が書写されたのは書写奥書によると大永５年～享禄４年（1525～ 1531）の期間であり，実隆が主導し，公条・公順（実隆長男・文明 16 年～没年未詳＝ 1484 ～？）の書写・校合によって成った．公条本がこうした三条西家の衣鉢を継ぐものであるならば，本文内容はもちろん形体もまたその時代性を示すもののはずであろう．

書誌学（Bibliography）は，典籍の年代測定を専門とするものではないが，対象の実体を分析する過程でそのもの自体の成立年代を推測することは，つねに随伴する問題意識である．その推測の目安は，通常，

1　装丁
2　奥書・識語
3　刊写の区別
4　本文内容

などによる．公条本の場合，２が存しないことは前記した．また，３については，古経典・古活字・キリシタン版など特別な例を除いて刊本の時代が下がることは周知の事実である．４は原文に対する本文の純度を論ずる Text critique を優先させるものであって，必ずしも容器としての典籍と並行ないし一致するものではない．

１に関連して，考えうる細目として，

(1) 表紙
(2) 法量
(3) 綴じ
(4) 料紙
(5) 書風

などがある．これらの基準に照らしてみると，日大本三条西家証本は，(1)鳥の子紙の表紙，(2)縦 17 cm×横 17.5 cmの枡形本，(3)列帖装，(4)鳥の子紙，(5)実隆・公条・公順の寄合書であり(岸上，1994)，16 世紀前半と伝える書写奥書の年代にふさわしい体裁をしている．

一方，公条本はどうか．

古典籍のあつかいにある程度習熟した者であれば，その外貌（図１）を一見するだけで，公条本の概略を把握することができるであろう．(1)奉書(厚漉の楮紙）の反古紙背を梔子で染めた紙を利用し，現在の紙

図１　公条本桐壺の巻表紙

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

背(本来の表)に「松たいら伊予守」「松たいら越前守」などの文字が見える．(2)縦 29.9 cm×横 19.1 cmと大きく，(3)袋綴，(4)楮紙，(5)一筆ではないやや稚拙な寄合書（横井，1999）．そのいずれの項をとりあげても，江戸時代後期か，あるいは中期を大きく遡る特徴を示すものではないと推考される．

公条本の書風を検討してみると，４種ほどの書体を見出すことができ、これと公条の筆跡と比較することによって年代比定の参考とすることができよう．日大蔵三条西家証本には手習・夢の浮橋の両巻末に実隆の奥書が遺されているが，細川幽斎（俗名藤孝：天文３年～慶長 15 年＝ 1534 ～ 1610）の証言（久原文庫本・天正 16 年＝ 1588 校合奥書）によれば，該本の桐壺・帚木ほか 12 巻が公条の筆跡として確実であり，他に 14 巻が公条筆と見なしうると認定されている（岸上，1994）．これと対比するに，公条本のいずれの書体も合致しない．

図２はａ公条本の桐壺の巻冒頭とｂ公条筆の日大本の同箇所を並置したもの．

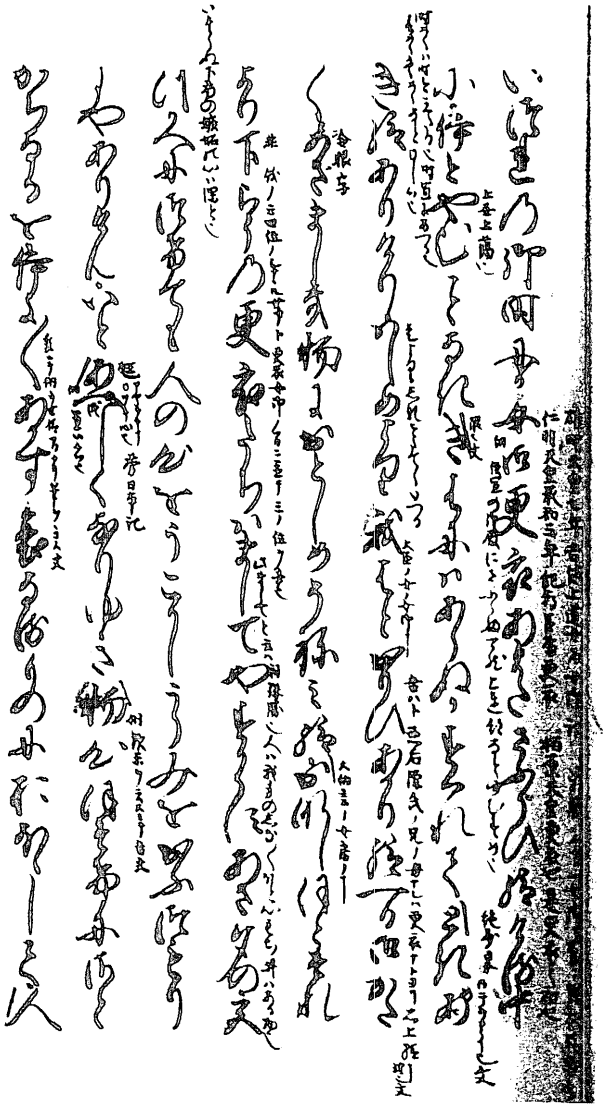
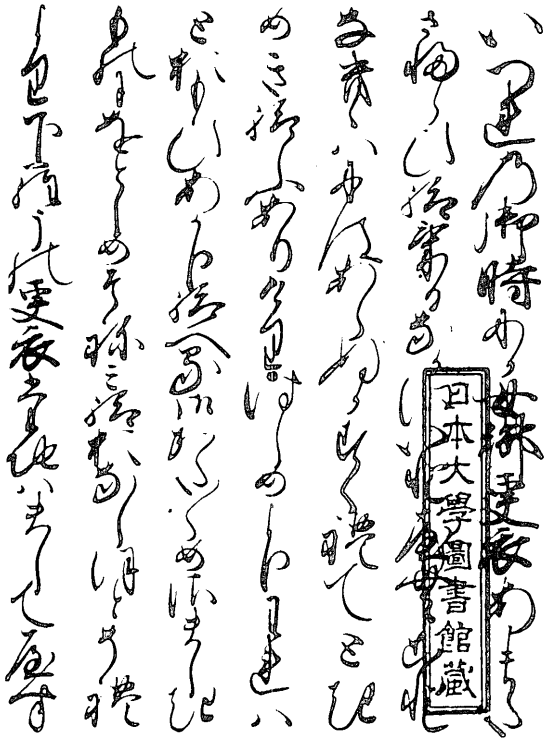


図２　　ａ公条本桐壺の巻冒頭部分

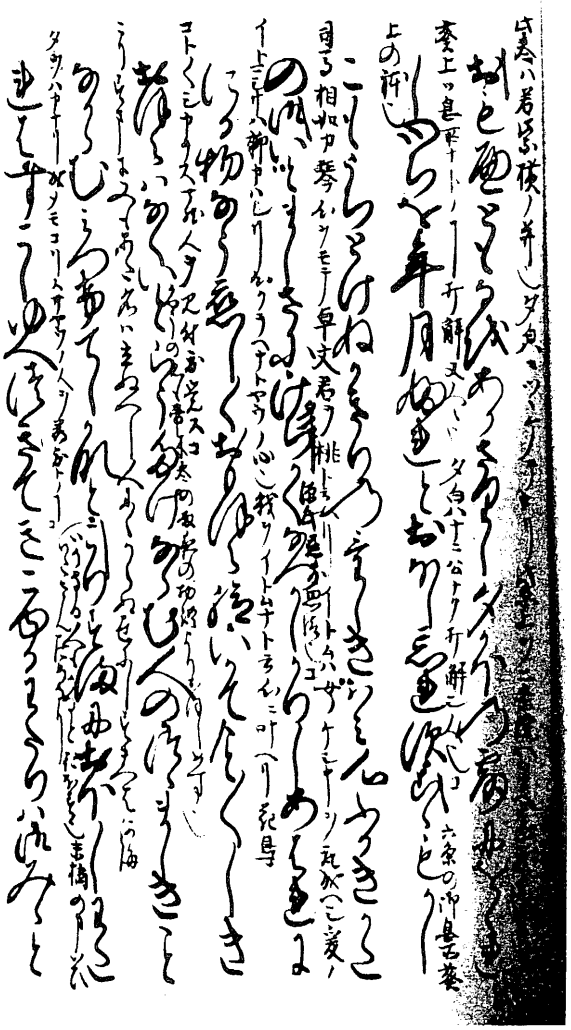


ｂ日大蔵三条西家本（公条筆）

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

図３はａ公条本の末摘花の巻冒頭とｂ公条筆の日大本の同巻冒頭を並置したもの．



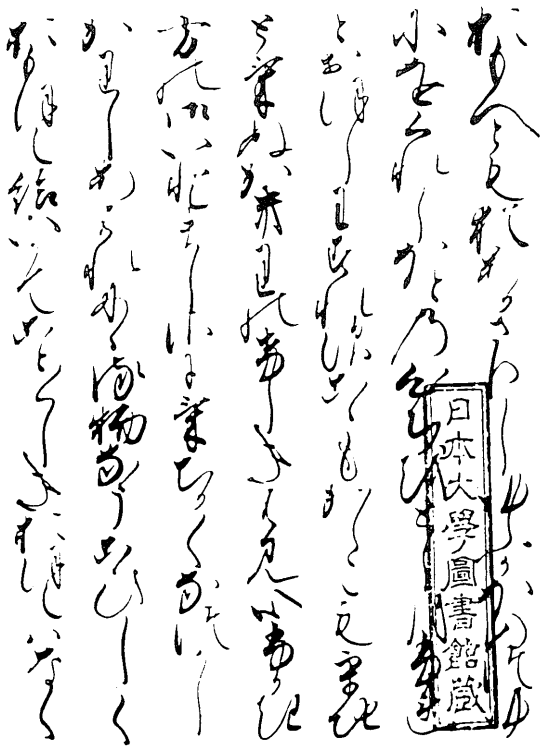


図３　ａ公条本末摘花の巻冒頭部分　　ｂ日大蔵三条西家本（公条筆）

例示は以上に留めるが，他巻も同様と判断して差し支えないほど明確な差異がある．国文学に携わる者の経験値からすれば，公条本のいずれの書体も稚拙で，古典を書写し馴れた者の筆跡とは称しがたい．実隆・公条ほどに，癖のある右肩上がりの字体ながら練達のそれとは縁遠いと見なして大過あるまい．

三条西実隆と公条は実の親子であると同時に古典学の師弟でもあり，その筆跡も継承して紛らわしいという事実はある．同じ「三条西家本」の名を冠する『和泉式部日記』（宮内庁書陵部蔵）は実隆壮年時の筆跡と考えられてきた（吉田，1964，竹鼻，1974）が，下の図に示すように公条筆にも擬することができる．

図４のａ群は実隆の奥書のある手習（① 24 ウ，③ 1 オ，④ 43 ウ）・夢の浮橋（② 19

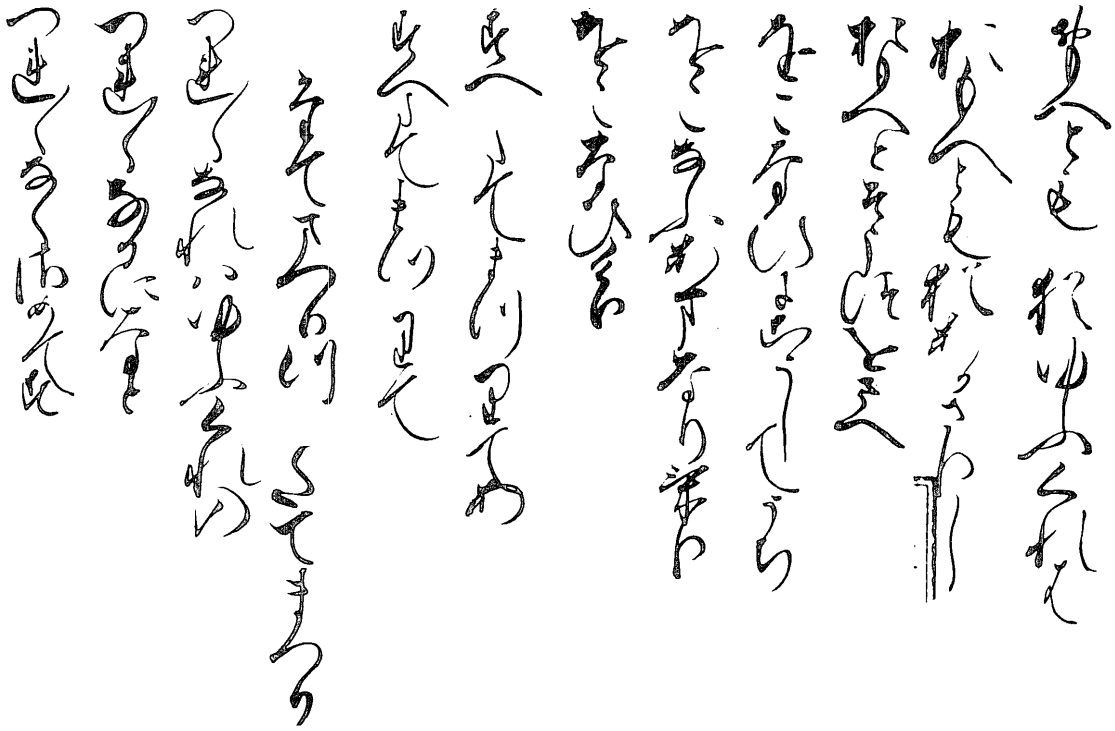
NII-Electronic Library Service

Nagoya University

ウ）の両巻より，b群は公条筆の若紫の巻（①7ウ・②③8オ）・末摘花の巻頭（④1オ）より，c群は三条西家本『和泉式部日記』（① 50 ウ，②5オ・7ウ，③8ウ，④ 45 ウ）より，とそれぞれ部分を抜き出して対比したもの．ごらんの通り1字単位で対比すると酷似していることが明らかであろう．

図4

a① b① c① a② b② c② a③ b③ c③ a④ b④ c④



筆跡の判定の難易については，古典籍・古文書あるいは著名人物の筆跡の偽物が多く古書市場に出回っていて，真偽の判別を困難にしている現実がある．書体のみでなく，本の外形や綴じ・料紙などから総合的に時代・筆者を想定している所以である．従って，書誌学は「書物に関する博識と多大の経験と熟練とがなければ」ならないとされている（山岸，1977）．国文学分野において，熟練を要する書誌学が敬遠されて，観念をもてあそぶに似た議論が横行するのは故なしとしない．また，書誌学，文献学といえども，経験値という判断基準を有するとはいえ，いわば職人芸ともいうべき閉鎖性ないし独断を生み出しかねない．

そこで書誌的資料に対する自然科学的情報による基準が渇望されることになり，加速器質量分析計を用いた ^{14}C年代測定を行うこととなった．

3．公条本の ^{14}C年代測定

1995 年（平成3年），実践女子大学図書館では公条本の修補作業の際に，2つの発

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

見があった．その１は，表紙の紙背の文書であり，現表紙が装幀された年代推定の材料の１つとなったことは上記した．その２が，表紙と見返し紙の間に補強材となっていた反故紙である．図書館では不要となりはしたが廃棄されず，同大・文芸資料研究所に託されたのである．この反故紙は，虫損でぼろぼろになっていて判別しにくいが，

１．別の何らかの本（折皺から復元すると公条本より小型の 22.5cm×16cm の表紙になるため，そう推定される）の表紙反故

２．１の表紙に貼付されてあった見返し紙

３．見返し紙（２とは別種）

の３種であり，１と２は表紙の芯紙として用いられていたものである．通常，個人所有でない文化財から試料を得るのは至難ではあるが，今回の調査はたまたまこの反故紙が使用できることとなったのを機に，３種をそのまま試料として使用した．

古典籍・古文書などの和紙による ^{14}C年代測定についてはすでに実績があり（小田・中村ほか, 1997, 小田・増田ほか, 1998, 小田・増田ほか, 1999, 小田・増田ほか, 2000），試料からグラファイトターゲットへの実験過程については別稿に詳記する予定なので本稿では省略にしたがい，結果のみ下の表に示す．

表１は「１」による結果を示し，以下，表の数字と試料の番号と対応させてある．なお，測定は各試料について３回ずつ行った．

表１　表紙反故のＡＭＳ ^{14}Ｃ年代

回数	^{14}Ｃ年代［BP］	暦 ^{14}Ｃ年代［cal AD］
1	271±41	1529( )1548, 1634(1644)1659
2	313±35	1516(1529,1548)1598, 1617(1634)1643
3	225±36	1648(1661)1671, 1779( )1798, 1945( )1945
平均	270±22	1639(1645)1653

表２　表紙に貼付された見返し紙のＡＭＳ ^{14}Ｃ年代

回数	^{14}Ｃ年代［BP］	暦 ^{14}Ｃ年代［cal AD］
1	243±33	1643(1655)1665, 1784( )1790
2	206±33	1656(1666)1675, 1776(1783,1792)1801, 1940( )1946
3	189±29	1662(1671)1679, 1740( )1754, 1756(1779,1798)1804, 1935(1945,1945)1947
平均	212±18	1659(1664)1670, 1780(1784,1788)1797

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

表３　見返し紙のＡＭＳ ^{14}Ｃ年代

回数	^{14}Ｃ年代［BP］	暦 ^{14}Ｃ年代［cal AD］
1	198±35	1658(1668)1678, 1742( )1749, 1758(1781,1796)1804, 1936( )1946
2	220±33	1651(1662)1672, 1779( )1798, 1944( )1945
3	152±33	1672(1681)1694, 1726(1735)1778, 1799(1806)1813, 1850( )1863, 1918(1932)1943, 1945(1947)1949
平均	190±20	1665(1671)1676, 1763()1772, 1775(1779)1784, 1789(1798)1802, 1939(1945,1945)1946

公条本自体はもとより，今回試料として用いた反故紙類も制作年代の手がかりとなる直接の資料を欠くため，熟練の書誌学者でもなかなか歴史年代を確定することは難しい．しかし，試料の１，２は反故として再利用された紙であり，現在の公条本総体から見ればやや古い時代を指すのが当然の帰結である．

したがって，試料１の表紙反故が 17 世紀なかば，試料２の表紙貼付の見返し紙が 17 世紀後半から 18 世紀後半という数値が得られたのに対して，試料３の見返し紙が 17 世紀後半から 19 世紀初頭となったのは，現公条本の制作年代を考慮する上で１つの基準点としてとらえておく必要があるだろう．ただし，この見返し紙も虫損の甚だしさは他の試料とほぼ等しく，また大きさも復元推定寸法が 26.5cm×20.5cm となって公条本の寸法 29.9cm×19.1cm と合致せず,直接本文の本紙と一致するものではない．

以上の結果は書誌学的知見による判断と矛盾するものではなかった．むしろ相互にその方法の特徴を分かち合いつつ補完したと考えて差し支えないものであったと評価しておきたい．

謝辞

本研究の一部には，日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究(A)，課題番号：12780106，研究代表者：小田寛貴）を使用した．記して謝意を表します．

参考文献

小田寛貴・中村俊夫・古川路明（1997）「鈴鹿本今昔物語集の年代測定」，『鈴鹿本今昔物語集－影印と考証－』，下巻，京都大学学術出版会，527－538

小田寛貴・中村俊夫・古川路明（1998）「名古屋大学タンデトロン加速器質量分析計による古文書資料の ^{14}Ｃ年代測定」，『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』，Ⅸ，324－334

小田寛貴・増田孝・中村俊夫（1999）「加速器質量分析計による古文書資料の ^{14}Ｃ年代測定」，『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』，Ｘ，60－67

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

小田寛貴・増田孝・吉沢康和・藤田恵子・中村俊夫・古川路明（2000）「加速器質量分析法による古文書および古経典の ^{14}C年代測定」，『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』，XI，123 − 143

岸上慎二（1994）「三条西家証本　解題」，『日本大学蔵源氏物語・三条西家証本１』，第１巻，八木書店，501 − 540

竹鼻績　（1974）『宮内庁書陵部蔵 和泉式部日記 解題』，日本古典文学会，19p.

山岸徳平（1977）『書誌学序説』，岩波書店，７ p.

横井孝　（1999）「山岸文庫蔵『公条本源氏物語』－解題ならびに「帚木・空蟬」影印」，文芸資料研究所『年報』，18，35 − 92

吉田幸一（1964）『和泉式部研究』，１，第１章和泉式部日記諸本の分類と解説，古典文庫，18 − 20

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

AMS Radiocarbon Dating of "The Tail of Genji" of Calligraphy attributed to Kin'eda

Yokoi T.[1], Oda H.[2], Nomura S.[1], Nakamura T.[2], Ueno E.[1], Niu E.[2]

1) Jissen Women's University, Hino 191-8510, Japan.

2) Dating and Materials Research Center, Nagoya University, Nagoya 464-8602, Japan.

The Tail of Genji of C.a. Kin'eda are 25transcriptions of *The tail of Genji* by the name of Kin'eda's text. These belong to Yamagishi Tokuhei Bibliotheca in The library of Jissen Women's university.

Kin'eda was modeled after a real man, Sanjonishi Kin'eda who was a legitimate son of Sanjonichi Sanetaka. He was also a classicist and a *Waka* poet like his father getting known as the principal classicist in the late Muromachi period. A study of *The tail of Genji* was continued by his son Saneki through three generations. Their fruitage is called Sanjonishi-Genji-Gaku in Japanese Literature. Although their works are stood high in estimation, Kin'eda's text are not much in evidence. But the possibility of an immediate connection between both get to prove the new finding of unknown transcription belonging to Sanjonishi family. It makes more meaningful.

Following traditional bibliography, it was the conclusion that this transcription was unrelated with Sanjonishi Kin'eda. Because it's dimension, seam, material, handwriting and the like showed different period (maybe the tail end of the middle Edo period). However, we think it is difficult to decide it by this method, for bibliography has necessary for skill of many divergences. For that reason, we groped for another way at science, and reached into AMS Radiocarbon Dating at Nagoya University. It was a finding that this transcription was made through the late 17 th into the early 19 th centuries. This result corresponded with the finding on Japanese bibliography and so it is considerably authentic.

NII-Electronic Library Service